

第 22 回 マルチモダリティシンポジウム VERSUS 参加報告

柏葉脳神経外科病院 先端医療研究センター 平野 透

2024年6月1日(土)に第22回 マルチモダリティシンポジウム **VERSUS** が開催されました。今回は「骨イメージングのコツ：見せるよりも診せる撮影技術」というテーマで教育講演、ランチョンセミナー、特別講演、シンポジウムが行われました。ここ数年、新型コロナウイルス感染症(covid-19)の影響で聴講者が会場に参加することが難しい状況であり、ほとんどの方が **web** での聴講ではありましたが、会場 + **Web** のハイブリッド開催を4年ほど行っていました。しかし **covid-19** も5類になって1年経ち、今回の **VERSUS** では5年ぶりに会場参加のみでの開催になりました。**VERSUS** の根幹であるシンポジウムでは一般撮影、**CT**、**MRI**、核医学の4名の演者からそれぞれの分野での骨イメージングの特徴について講演とディスカッションがあり、**CT** からは手稲溪仁会病院の中島広貴さんが **Dual Energy CT(DECT)** を用いた脊椎領域を中心とした骨イメージングの臨床応用などを発表されておりました。手稲溪仁会病院は北海道内でも **DECT** を様々な領域で応用されており、多くの臨床的な有用性や多彩な処理画像を報告されておりました。**CT** 特有の全身領域に対して高速且つ高精細な画像が得られる特徴から全脊椎領域での **DECT** を用いた圧迫骨折や脊椎の骨転移の評価に有用なモダリティであり、**MRI** が用いられる領域での **CT** での活用について自験例を紹介されておりました。ディスカッションでは「椎体病変は **CT** か **MRI** か？」のような議論もありましたが骨皮質の評価が得意な **CT**、**MRI** が得意なプロトンを多く含む骨髄質など、それぞれのモダリティの得意分野が異なるため現状では共存すると両方のモダリティの演者が回答しておりました。

個人的には全脊椎など広範囲で病変の検索を **DECT** で行い、病変部の様々なシーケンスを用いた詳細な信号変化に関して **MRI** を用いるのが現状かとシンポジウムを聞いて感じました。

将来に関しては **Photon-Counting CT** による様々な **Spectral** イメージングや **MRI** での **CT Like Bone Imaging** など新しい技術が今後も出てい

くと思われますので将来の骨イメージングがどうなっていくか？は想像出来ませんし、楽しみです。

今回の **VERSUS** では骨イメージングとは別に国立情報学研究所 大規模言語モデル研究開発センターの高木 優先生が深層学習とヒトの脳活動に関する研究の一端を報告されました。参加していた学生さん達からの質問が多く、学生さん達世代が深層学習を用いた臨床研究をさらに進めていくのだろうと思いました。

冒頭にも書きましたが今回の **VERSUS** は会場参加のみの開催であり、近年の **Web** 研究会慣れした方が会場に参加してくれるか？心配していましたが 200 名近い方が会場に集まって頂き久々に会場内が賑わう研究会でした。質問する方と演者が対面で議論するのはやはり臨場感があり、また会場内だけのディスカッションのため講師の方の本音トークも聞くことができ対面での良さを再認識した楽しい研究会でした。



VERSUS 当日会場の様子、多くの参加者で賑わっていました。